

ものであると考える。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)

倉公淳于意 その一

家本誠一

はしがき

倉公、淳于意は、紀元前二世紀頃に活躍した前漢の医師である。その経歴は『史記』の『扁鵲倉公列伝』に詳しい。これについては後段で考察する。

『史記』・『倉公伝』には、倉公が経験した二十五件の症例が報告されている。その各々の症例報告は、次のような項目にわたって詳細に記されている。

病名 症状 治療 転帰
病因 診断 病理 病位

私はこれらの項目について、倉公の記載する所と『素問』『靈樞』の記述とを比較対照すると共に、現代医学的になどのように理解したらよいかをも検討して、その医学の内容を明らかにしたいと考える。

先ず病名(含症状)の検討から始める。

一 病名と症状

『倉公伝』に記された病名を列挙すると次のようである。

疽 鬲 疝 熱病 風痺 肺消 寒熱 瘕 迴風 風蹶
熱蹶 蹶上 内寒 蟻瘕 傷脾(内関の病) 齟齬
不乳 腎痺 肺傷(打仆症) 中熱 痺 沓風
これらの病名は、一、二の留保を要するものもあるが、
略、『素問』『靈枢』の中に認めることができる。

以下に各病名について考える。順序は不同である。

二 風

『素問』においては、風は軽症熱性疾患を意味している。但、風論四十二に偏枯が風の類症として挙げられており、『靈枢』の熱論二十三には偏枯と共に痺が記載されているが、これらは何れも脳神経障害による疾患である。『金匱要略』以後には、風といえば後者のことになるが、倉公の場合はどうであろうか。

倉公の症例には、風と名のついたものが四つある。

(一) 風痺客脛

風邪が脛、則ち膀胱に宿った病で、大小便の排泄障害を起している。膀胱の炎症性疾患と考えてよいであろう。

(二) 迴風

迴は洞で、迴風は洞風である。これには症例八と十九と二例があるが、どちらの症状も下利である。則ち洞泄性の下利を示す腸炎であろう。殊に症例八は衆医が寒中と診断している例であるが、寒中とは赤痢を含む下利腸炎である。

(三) 風蹶

蹶(蹶)とは、一般には冷えのほせであるが、ここでは、氣の上逆による胸内苦悶である。汗をかいて地に伏せていた為に身体を冷やして感染症を起し、この症状を得たものである。『金匱要略』の奔豚の類であろう。

(四) 沓風

沓とはどういう意味なのかよく分らない。しかし、四支不用と瘡という症状を示している所から脳神経疾患と考えてよいであろう。

以上、倉公の、風あるいは風の随伴症状は、四例を数えるが、その内、三例は感染症、一例が脳神経疾患ということになる。この状況は『金匱要略』よりは『素問』『靈枢』の場合と同じと考えた方が妥当だと思われる。

三 厥

『素問』では厥と記される。これに関する倉公の症例は三例ある。

(一) 風 厥 (前出)

(二) 熱 厥

酒の飲み過ぎによる異常な足のほてりと、それによる苦悶である。『素問』厥論の熱厥と同じ。

(三) 厥 上

症状は頭痛、身熱、煩悶である。髪を洗って乾かないまま臥せていてこの病を得た。これも冷えによる感染症で、激しい頭痛を起こしてきたものであろう。『靈樞』の厥頭痛の類と考えられる。治療として足の陽明胃経の脈を刺している所から見て、狂躁のような神経症状も示していたかも知れない(煩悶)。

以上、厥は何れも自律神経殊に血管運動神経の異常による症状であって、『素問』厥論の範囲内の病症である。皆治癒している点から見て、重症の血管病変は含んでいないことが分かる。厥には、頸部の血栓性動脈炎や脈なし病などの器質的疾患が含まれているのであるが、倉公の症例の

中にはないようである。

扁鵲の医学にくらべて、倉公の医学は稍々つつきにくい。しかし子細に見ると『素問』の医学とよく似ていることが分る。倉公の生きた時代は『素問』『靈樞』が成立しようとしていた時代である。似ていない方がおかしい、というべきかもしれない。

(横浜市)